シンポジウム

ワイルドを取り巻く視覚芸術―絵画、映画、サヴォイ・オペラ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　司会・講師　桐山恵子

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　講師　髙橋美帆

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　講師　金山亮太

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　講師　池田祐子

オスカー・ワイルドの活躍した19世紀後半から20世紀にかけては、作家や画家、あるいは舞台にたずさわる人々が、自身の芸術領域を超えて、他の芸術媒体への関心をより深めていき、それらを自身の作品に反映させたり、新しい総合芸術の創造を目指したりするような傾向が見うけられる。そしてその傾向は、脚色されたワイルド作品が、舞台や映画で上演され続けている現在にも当てはまるだろう。そこで本シンポジウムでは、ワイルドおよびワイルド作品を、美術、装飾、サヴォイ・オペラ、映画といった様々な視覚芸術とのつながりから分析し、これまでにあまり注目されることのなかったワイルドの芸術観や彼のアイルランドに対する意識のありようを考察してみたい。また現在の映画監督による、ワイルド作品の新たなとらえ方も紹介する。

*The Picture of Dorian Gray* のBasil Hallwardはいかなる画家か？

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　桐山恵子（和歌山大学准教授）

『ドリアン・グレイの肖像』のバジル・ホールワードといえば、ドリアンのような超絶美青年でもなく、かといってヘンリー卿のような機知に富んだダンディーでもない。物語の途中からは存在感自体が薄くなり、ようやくドリアンと再会したかと思えば、直後に刺し殺されてしまうという、小説中とりわけイケてないキャラクターだと思われがちだ。しかし、物語の契機となるドリアンの肖像画を描いたのはバジルであり、彼の本職は画家である。そこで本発表では、彼の絵画制作の様子や画風の特徴を考察する。ヴィクトリア朝の美術界において、画家としてのバジルはどのような位置を占め、いかなる評価を得ていたのだろうか。芸術の最先端であるフランスの首都パリで、新しい美術界の流行を生みだしていたアート・ディーラーとバジルとの関係にも触れてみたい。

ワイルドと装飾

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　高橋美帆（関西大学教授）

ワイルドの生きた時代は、アーツ・アンド・クラフト運動からアール・ヌーヴォーへの移行期と重なる。ワイルドの好んだ画家たち―ロセッティ、モリス、バーン＝ジョーンズ、リケッツ―はこうした運動に深く関わり、絵画だけではなく装飾デザインも多く手掛けた。そのデザインは書物の装丁や挿絵にはじまり、ステンドグラスやジュエリーに至るまで、多岐に渡る。ワイルドも装飾デザインに強い関心を持ち、彼の服飾にまつわるエッセイと実践はよく知られるところである。彼らがそろって敬愛したのが、唯美主義の原点かつラファエル前派の霊感の源ともいえるキーツである。ワイルドも若い頃キーツに寄せる詩を残し、彼の手稿や直筆書簡を入手している。本発表では、このようなキーツへの傾倒を再考しながら、ワイルドが当時の芸術運動の流れに乗って、いかに装飾を自分の作品に取り入れていったのかを検討したい。

『ペイシャンス』から『ユートピア有限会社』へ―ワイルド、アメリカ、アイルランド

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　金山亮太（立命館大学教授）

サヴォイ・オペラ『ペイシャンス』(1881)の中で彼自身が風刺されている唯美主義についてアメリカ人を啓蒙するために、ギルバート＆サリヴァン劇団と共に同年末に渡米したワイルドは、「英国ルネッサンス」、「住宅装飾」、「芸術と職人」などの講演を全米各地で行った。また彼は、アイルランド系移民の多い都市（サンフランシスコなど）では「1848年のアイルランド詩人たち」という、母国絡みの講演も行っている。講演旅行から約10年後、サヴォイ・オペラの最新作『ユートピア有限会社』(1893)では、アイルランド独立運動を下敷きに、イギリスの政党政治が風刺されていた。しかしその頃の彼は、母国の闘争とは距離を置き、『サロメ』や『ウィンダミア卿夫人の扇』などを発表して、文壇の寵児の地位を享受していた。彼の講演やサヴォイ・オペラの作品の内容を紹介しつつ、ワイルドのアイリッシュネスの覚醒とその後について考察する。

ワイルドの受容―映画*The Importance of Being Earnest*にみる「新しさ」の変容

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　池田祐子（中村学園大学准教授）

19世紀末に書かれた風習喜劇『まじめが肝心』の魅力を、時代を縦断して今に伝える芸術の一形態として、映画を取り上げたい。随所で誇張された演出法は、ワイルドが描こうとした同時代の精神性の諷諭である。現代のオーディエンスはこうした明快な視覚的表現を通して、世紀転換期の人々が予感していた新しい時代の到来を追体験することが可能となる。「新しい」という表現は「ニュー・ウーマン」「ニュー・ヘドニズム」に代表されるように、19世紀末の特徴を表す一つのキーワードと言えるが、監督・脚本をつとめたオリバー・パーカー氏が映像化したのもまた、世紀末の新しい技術や新しい男女の表象であった。その過激な演出方法の意図を読むことで、元々ワイルドが書いた女性キャラクターの解釈が広がりを見せることについても言及したい。